

植生と緑環境

私たちが自然を眺めるとき、まっ先に目に入るのは、自然を特徴づけている植物の集団です。このような植物の集団を植生と言います。

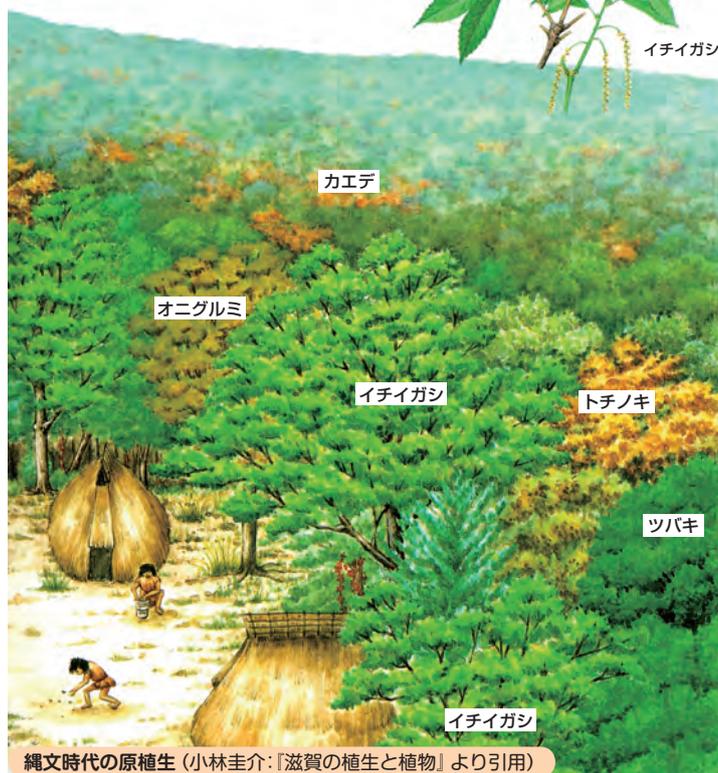
植生はいろいろな原因で変化して現在にいたっているけれど、人間の影響が加えられていない植生を原植生と言います。この原植生が何らかの原因で破壊されたあと、長い期間を経過して原植生と同じような種類（種類組成）に復元された場合、それを自然植生と言います。

人間の直接、間接のさまざまな影響によって、その土地固有の自然植生が失われ、種類組成が変化してしまった植生を代償植生と言います。現在、その土地に実際に生育している植生を現存植生と言ひ、古くから人間が生活している草津市のような地域での現存植生は、ほとんど代償植生となっています。

縄文時代は、温暖な気候下でイチイガシなどの照葉樹林が発達し、その森のなかで自然からの豊富な贈りものを食糧として縄文人が豊かな生活を営んでいました。



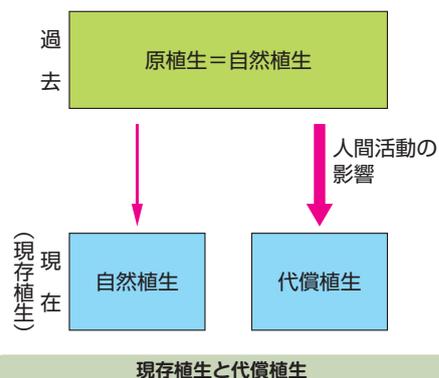
イチイガシ



縄文時代の原植生 (小林圭介:『滋賀の植生と植物』より引用)



大宮若松神社の自然植生のシイ林 (村長昭義)



山田正八幡宮のシイ優占の照葉樹林 (村長昭義)



馬場町丘陵地のコナラ優占の落葉広葉樹林 (大谷一弘)

原植生と自然植生

原植生は、人間が手を加える以前に成立していた植生をさしますが、木の実や草花を採取したり、イノシシやシカを捕まえたりして食糧にしていた時代の採取・狩猟生活の行為は人間の影響に含まれません。自然植生は、人間の影響をあまり受けずに成立している植生で、かつては人間

の影響が加わっていたとしても、現在その影響が認められず、原植生に近い植生に到達しているものも含まれます。こうした植生は、人間が利用できないような湿性地やげけ地、宗教的な聖域としての社寺の境内など、草津市内のごく一部にしか残っていません。

現存植生と植生単位

代償植生は、自然植生に人間のいろいろな影響が加わり、自然植生の代償として成立するようになった植生のことです。雑木林であるクヌギ-コナラ林、アカマツ林、ヒノキ・スギ植林、畑地雑草のクラスビシヤク群落、路上植生のオオバコ群落などがその例です。現時点で、草津市に実在している植生で、水田、畑地、道路、池、川、山などに見られる植生は全て現存植生です。

こうした草津市の現存植生に対して、今回の調査では310地点において植生調査を行った結果、森林植生では5群集と9亜群集および13群落と2下位群落、草本植生では4群集および31群落と16下位群落の、合計79植生単位が識別されました。また、1978年においては、森林植生では2群集5亜群集と10群落2下位群落、草本植生では1群集2亜群集と8群落7下位群落の合計37植生単位が識別されました。

現存植生と自然植生の配分 (小林圭介:『第19回 全国育樹祭記念 滋賀の植生と植物』より引用)



植生単位は植物群落単位ともいい、種組成に基づいて区分、分類、体系化された植物群落の単位で、植物社会学命名規約にしたがって単位名が命名されます。植生単位の基本単位は群集と言います。しかし、通常、群落名は便宜的に、優占種などによってサカキ群落やアラカシ-クスノキ群落のような名称となります。

草津市の1978年と2013年の森林植生単位の比較

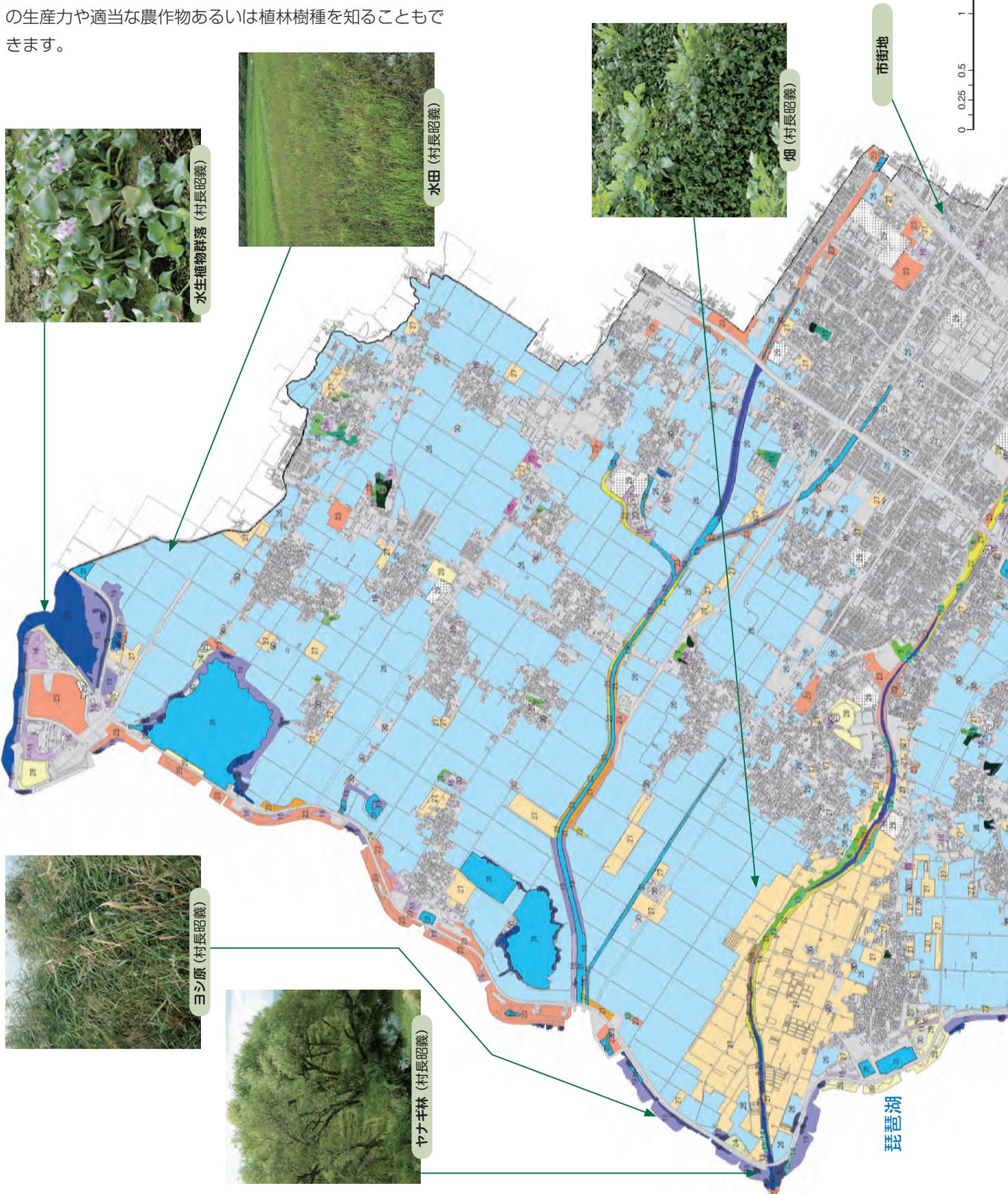
1978年の植生単位	2013年の植生単位	1978年の植生単位	2013年の植生単位
暖温常常緑広葉樹林		アカマツ林	
1. シイ-カナメモチ群集 1) タカノツメ亜群集 2) ジャノヒゲ亜群集	1. シイ-カナメモチ群集 1) 典型亜群集 2) クスノキ亜群集	9. アカマツ-モチツツジ群集 1) 典型亜群集 2) オオイワカガミ亜群集 3) ハナゴケ亜群集	8. アカマツ-モチツツジ群集 1) 典型亜群集 2) オオイワカガミ亜群集 9. アカマツ-ヒヨドリバナ群落
2. サカキ群落	2. オガタモノキ群落	植栽針葉樹林	
3. アラカシ群落	3. アラカシ-クスノキ群落	10. ヒノキ群落 1) ソヨゴ下位群落 2) ヤブラン下位群落	10. ヒノキ-コナラ群落 11. ヒノキ-エノキ群落
湿生林		11. クロマツ群落	12. クロマツ群落
4. ハンノキ-ヨシ群落	4. ハンノキ-イヌツゲ群集	竹林	
5. アカメヤナギ-タチヤナギ群落	5. アカメヤナギ-タチヤナギ群落 1) イシミカワ下位群落 2) オニタビラコ下位群落	12. マダケ-モウソウチク群落	13. モウソウチク群落 14. ハチク群落 15. マダケ群落
暖温常落葉広葉樹林		先駆低木林	
6. ケヤキ-ムクノキ群落	6. ケヤキ-ムクノキ群集 1) クスノキ亜群集 2) マダケ亜群集 3) センダン亜群集	植栽落葉広葉樹林	
7. クスノキ群落	7. クヌギ-コナラ群集 1) リョウブ亜群集 2) ネザサ亜群集	16. オオバヤシャブシ群落 17. アカメガシワ群落	
8. コナラ群落		18. ハリエンジュ・ニワウルシ群落	

現存植生図

植生単位の具体的な広がりをも地図上に示したものが植生図です。現存植生の植生単位を地図上に示したものが現存植生図です。

植生図の利用は大変に広く、例えば、植生を指標とした自然環境診断や植生の保護・復元計画、土地利用計画などの基礎図として利用されています。また、植生図から土地の生産力や適当な農作物あるいは植林樹種を知ることができます。

草津市の植生のほとんどは水田と畑です。ヨシ原やヤナギ林、ハンノキ林など自然度の高い重要な植生は、すべて河川や内湖、琵琶湖、池などの水辺に限られています。市街地の樹林は神社などに残存していますが、里山のアカマツ林やクヌギ・コナラ林などの樹林は宅地や工場に変わって、南端に少し生育しているだけです。



水生植物群落 (村長昭義)

水田 (村長昭義)

畑 (村長昭義)

ヨシ原 (村長昭義)

ヤナギ林 (村長昭義)

琵琶湖

市街地

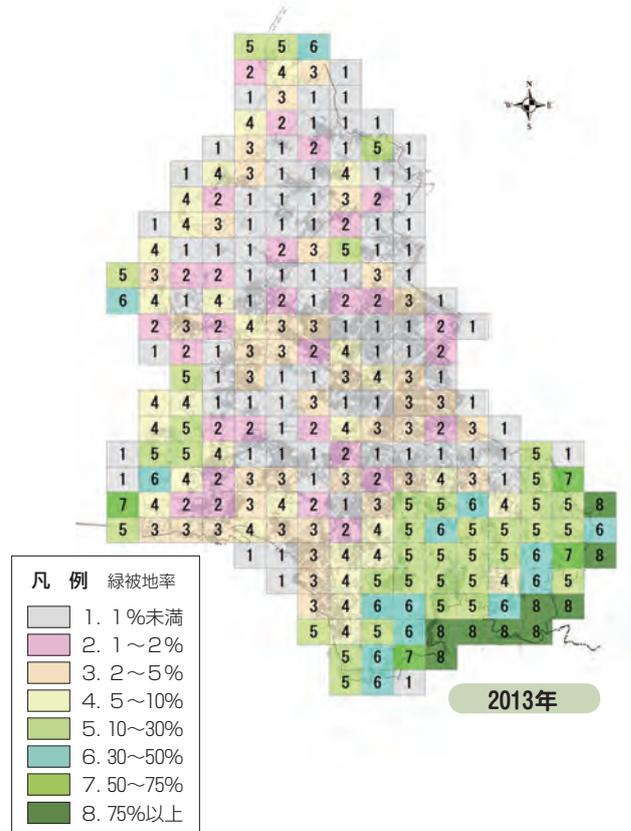
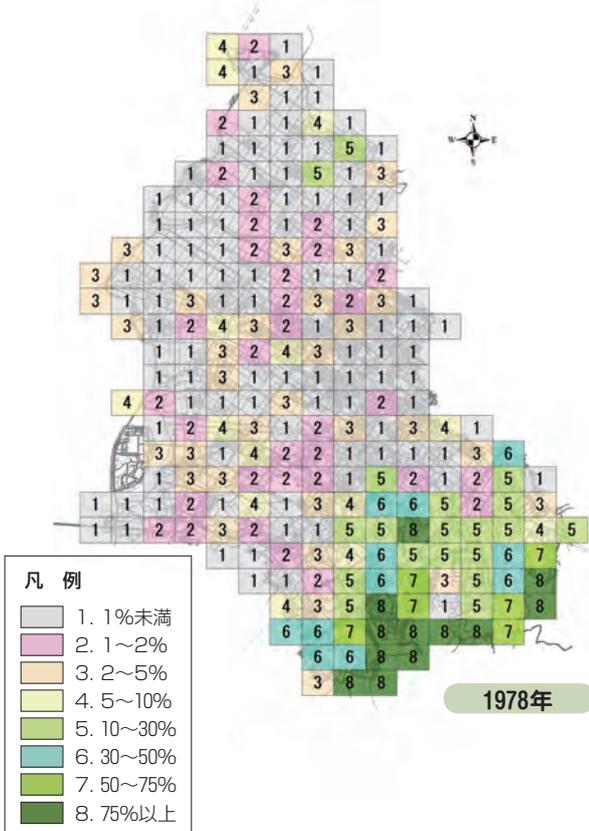


緑の量の変化

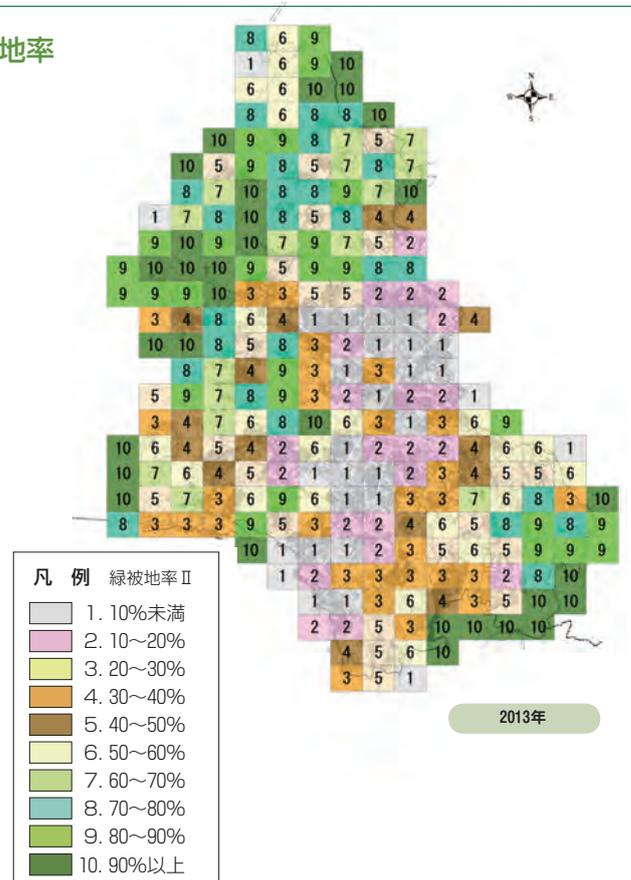
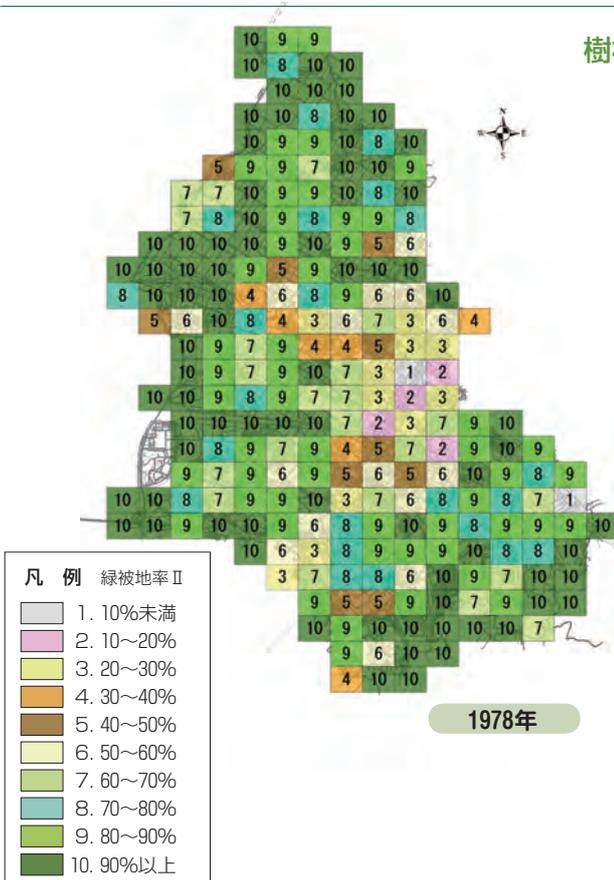
緑の量を樹林は8段階、樹林と草地は10段階に分けて示しました。緑や黄緑は緑の量が多い場所、灰色やピンクは緑の少ない場所です。1978年と2013年の緑の量を比べると、湖岸緑地で樹林が増えた場所もありますが、樹林の

緑は少なくなっています。樹林と草地を合わせた緑については、大変減っているのが明らかです。緑が少なくなったのは、丘陵地の樹林、平地の水田や畑が市街地や工場に変わったことが原因です。

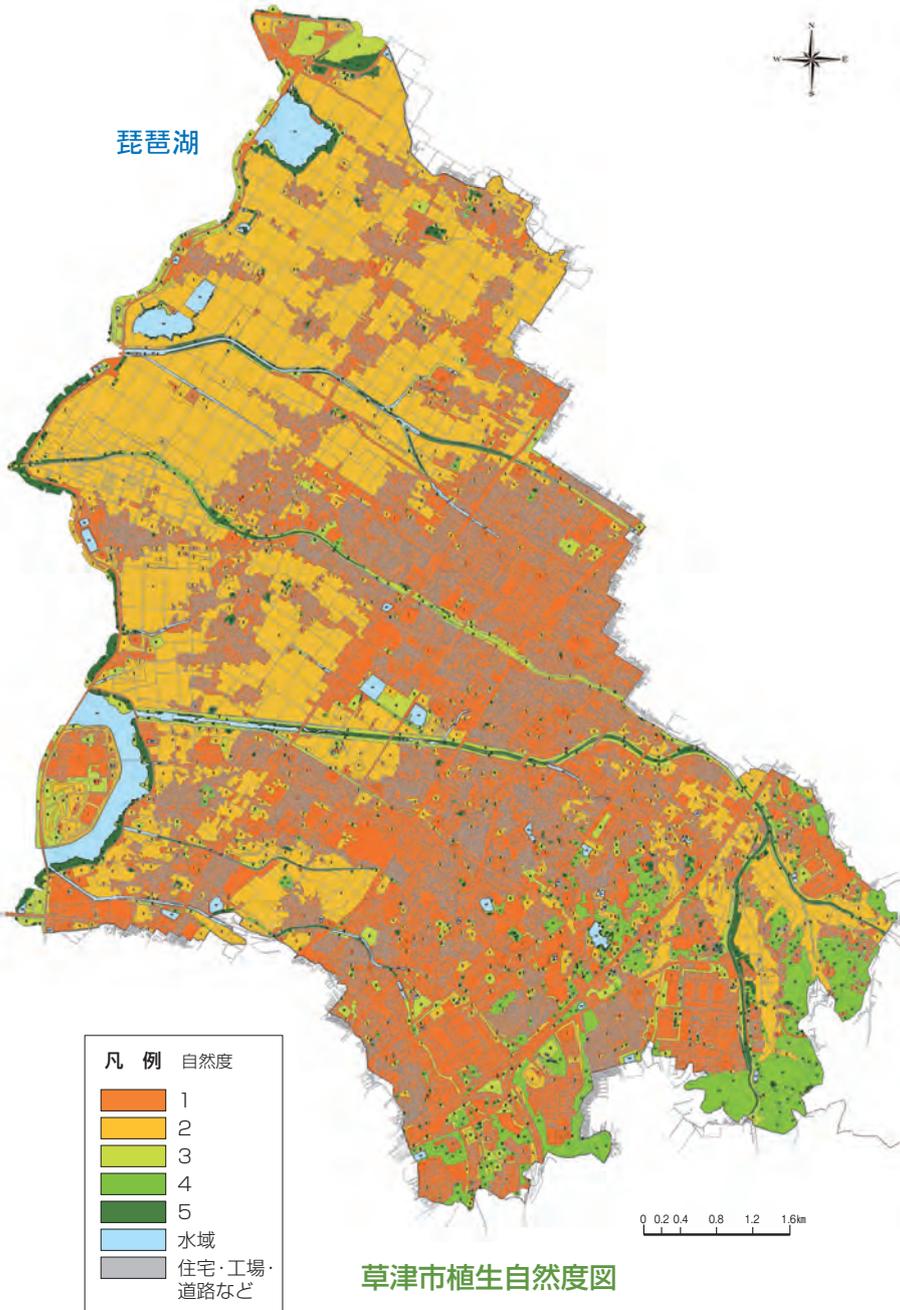
樹林率



樹林+草地率



植生自然度図



植生自然度図は、現存植生図に示されている植生単位を人為的影響の大小に着目して、その程度を5段階に分けた植生の自然度に読み替えることによって作成された図です。人間がその自然をどのように変化させてきたかが一目でわかる地図とも言えます。

最も高い自然度5は濃い緑色の場所で、琵琶湖湖岸や川沿い、池など水辺に集中しています。これはヨシ原やヤナギやハンノキの林です。

次に高い自然度4は緑色の場所で、竹林、人工林と市の南端に残るクヌギ・コナラ林、アカマツ林、エノキ林などの里山林です。こうした樹林は造成により分断されて小規模になっています。

自然度3は黄緑色での場所で、河川沿いにわずかに見られる草地で、なかでも在来のススキ・チガヤ草がわずかに残っているだけです。

草津市のほとんどの場所は、山吹色の自然度2の水田や畑と橙色の自然度1の公園や緑地などで、人工的な緑のため自然度は低くなっています。

灰色と水色の場所は、住宅地、工場用地、道路などの市街地と水域で、植生がほとんど認められないため、5段階の植生自然度階級からは除外されています。

植生自然度の高い場所は自然の守られてきた場所で、生き物の種類が多かったり、珍しい生き物のすみかになっていたりします。生物多様性を守るためには植生自然度の高い場所である自然を保護・保全していくことが大切です。

生き物の暮らす緑環境を守りましょう

草津市の2013年の植生調査結果から1978年と比べて、緑の量が極端に少なくなっていることがわかりました。緑は量だけなら木や芝生を植えて補うことができます。けれども、多くの生き物が暮らすことができる「緑の環境」を人工的に作り出すことは困難で、失った緑は取り戻すことができません。

貴重な植物や昆虫類、鳥類など多くのさまざまな生き物の暮らす緑環境を守るためには、まず今残っている自然度の高い、希少な動物の生息地となっている神社の森をはじめ、水辺のヤナギ林やハンノキ林、ヨシやツルヨシの分布している場所、貴重な植物の生育する湿地をそのまま守

っていくことが大切です。また、伝統的な維持・管理によって守られてきた多種多様な生き物が暮らしている里山のアカマツ林、クヌギ・コナラ林や、河川沿いのススキ・チガヤ草地は、今後も間伐や草刈りなどの維持・管理を行うことによって、いろいろな生き物が生息できる生物多様性の高い緑環境を回復あるいは再生することが大切です。

まずは、草津市のなかで少なくなってしまった、生物多様性の高い貴重な緑のある場所を見に行ってみましょう。いろいろな生き物に出会えるはずですよ。そして、この生き物たちの生活にとって欠かせない緑環境を皆で守っていきましょう。